

人間学的な視点で理解しようとする際には何の解決にもなり得ない。唯一考えられるのは、これがイエスの過敏なほどの自己反省と自己観察からくるということである。彼は、ふとしたことで女性に対する欲望を心の内に感じた自分の体験から、このように際だった反省的直覚を引き出してきたのであろう。あるいは、それほど強烈な女性の魅力の底深さを、どこかで思い知ったゆえの言葉ではないだろうか。ここではイエス自身が自己切開をしている。同じようなことは、「兄弟に対して怒る」ならばすでに、その兄弟を「殺した」ことになる（マタ⁵21-22）という飛躍した発言に際しても言えよう。おそらく激しい憤りを感じることも決して少なくなかったイエスは、自らその怒りの中に潜む「悪」の萌芽を等閑視することができなかつたのであろう。自己観察の見事な鋭敏さである。そうした透徹があつたからこそ、額面通りの「結婚破り」をしなければよい、文字通りの「人殺し」をしなければよい、とする律法墨守主義の「偽善」を、そのまま見逃すことができなかつたのであろう。

まとめ イエスの「結婚理想主義」とリアリズムの欠如

イエスの結婚観の中には、男女が神によって「一つ軀」に合わされたものという理解のもと（マコ²9）、一種の結婚理想主義が存在する。そのゆえに、彼は安易に当時の離婚肯定の家長的イデオロギーに与せず、むしろそれを「結婚破り」であると断罪することによって戦鬪的に通念と対

峙している。また、男の勝手な離婚観を打つというのは、社会的効用の面では、当時の女性たちの人権擁護という側面を突出させている。これは、他の伝承においても顕著な、イエスの女性たちへの好意と軌を一にする。社会の中で構造的に不利な状態に据え置かれた者たちへの彼の共感と、そうした構造への怒りが背後にあるであろう。例えば、大病は罪のゆえだとする当時の社会通念と、それに基づいて温存される抑圧構造への徹底的抵抗を貫いたイエスの姿と、ここには一致するものがあると言えよう⁽¹⁰⁾。

また、「結婚破り」に関しては、女性に対する欲望の隠れた発生をも、まぎれもない罪惡の生起として把える、過度なまでの内的鋭敏さがある（マタ⁵⁷128）。

しかしながら、この「結婚理想主義」ないしは「結婚破り」断罪には盲点が一つある。既述したように、離婚されてしまった女性は、再婚して初めて面目が回復されるし、生きていけたのである。しかしイエスは、「離縁された女を娶る者も、結婚破りを犯す」と言うことによって、現実には、女性のこの再婚の道を封じている。いったいイエスは、現に離婚させられてしまった女性がどのようにならなければよいと思っていたのか。それに関する配慮は、この文面からは感じられない。これは、「結婚」の理想主義の高さゆえの、リアリズムの欠如ではないか。当時の女性たちの権利の擁護であったはずの発言が、ある時点で反転し、現実にはある運命の女性たちの希望を剝奪することにもなっているのである。イエスは果たして、それに気がついていたのであろうか。

マリアの回想

……あの子は子供の頃から、ものにひどく熱中する子でした。八つか九つの頃、家の裏にいちじく木があって、その上にあつた小鳥の巣がこわれていると知って、どうしてもそれと同じものを作ってやるんだと言うのです。いろんな枯れ草やゴミや棒きれなんかを見つけてきて、前にあつたのと本当にそっくりの巣にするんですよ……それも真夜中までかかって、ランプの光で……。次の朝、その巣に鳥が来たと言って、それはもうよろこんでよろこんで、その顔は今も忘れません……。

あの子は五歳の時に、父親から、お前も大工になるんだ、と言われて仕込まれたのです。弟たちもそうでしたが、弟たちはかなりさぼっていました。でもあの子は、えらく熱心に仕事にはげみましたよ。父親からはずいぶん叱られていましたけど、でも

仕事をいやがったことはないんじゃないですか。特にクワとか、そういう畑で使うものを作るのがうまかったようです。だから、バル・ミツヴァ〔一三歳の成人式〕の時には、ほんとに父親が言ったんです、「お前にはもう、教えることがなくなっただけだ」。

その後、少しは父親といっしょに働いていました。あれは、あの子の一四か一五の時です。セッフォリス〔ナザレの北方、ほぼ六キロにある、古くからのガラヤの首都〕の金持ちさんのお宅を造るのにかり出されまして、それで二人で行ったのです。毎日、朝から晩まで行っていました。そうしているうちに、あのおそろしい事故がおこったのです。うちの人が、そのお宅の塔の上に石を積んでいたのですが、どういふわけか足を踏み外して、下におっこちてしまったのです。クビの骨を折って、即死だったと、後から聞きました。息子は、その父親のなきがらを背負って、あの長い道を一人で歩いてきたんでしょうね、夜遅く帰ってきました。こちらは、どうしたんだろう、何が起ったのだらうと、気が気でない思いで待っていました。戸が開いて、父親をかついでいるあの子の顔を見た途端、「あっ！」という間に事情が呑み込めたんです……わたしは、頭がぐらっとして……あの子の片手が支えてくれたのをぼーっと覚えてます……あの子は夜通し、泥まみれの父親のむくろの前で泣いていたらし

いのです……そのときから、あの子はセッフォリスには足を踏み入れていないと思います。

あの子が一番幸せだったのは、結婚してから一年とちょっとの間でしょうね。あの子は一九の時に、ナインの町の、わたしと同じ名前の女の子と結婚しました。あの子が農具をつくって差しあげた家の娘さんで、自分で見つけてきたのです。小さくてきゃしゃな子でした。嫁いだときは一五歳で、それからの二人はほんとに幸せそうで、わたしもよかった、よかったと思いましたよ。このマリアさん、若いのに料理が上手で、わたしのすることがなくなりましたみたいでしたけど。そうしているうちに、マリアが妊娠しまして、そしてやがて出産となったのですが、それが難産で……産婆のまねができるわたしも、何もしてやれなくて……二日ぐらい、うめいてうめいて……息子は仕事もせず、必死に付き添っていたんですが、夜おそく……死産でした……そして、朝になったら、こんどは母親の方が息をしなくなってしまったのです……衰弱死というんですか、真っ白い顔になって……あの子は気が狂ったように叫んで、叫んで……そして、死んだ嫁と死んだ子供のいる小さな部屋の戸を閉めてしまって、かんぬきをかけ、誰も入れずに、そんなふうにして一週間ほど、閉じこもったきりでした。わたし